

「楚漢名臣列伝」 宮城谷昌光 著 文藝春秋 2013年1月発行 (文春文庫)

本書は、中国の楚漢戦争の時代に活躍した人物の生涯を描いた作品です。楚漢戦争とは、陳勝・呉広の乱に乗じて挙兵した項羽と劉邦が繰り広げた闘争です。5年間の闘争の末に項羽を滅ぼした劉邦は、漢の初代皇帝に即位しました。本書に登場する人物は皆魅力的なのですが、今回は蕭何と曹参に焦点を絞って、彼らの生涯と不思議な人間関係について紹介します。

蕭何と曹参は劉邦と同じ沛県の出身であり、沛の役人として働いていました。その当時、中国全土を支配していた秦の始皇帝の死後、陳勝・呉広が反乱を起こすと、全土各地で反乱の火の手が上がり始めました。食い詰めた反乱軍が沛を襲うことを危惧した蕭何と曹参は、逃亡中の劉邦を呼び戻して、沛の県令（知事に相当します）に就かせました。少々気の毒ですが、元の県令は邪魔になったので沛の人達によって殺されました。

沛を離れた劉邦一行は、各地を転戦した後に、項梁（項羽の叔父）が率いる楚軍に合流しました。項羽と劉邦は力を合わせて秦と戦いました。しかし、秦を滅ぼし軍の実権を握った項羽が、劉邦を漢中という道の険しい土地へ押し込めたため、両者は敵対するようになりました。これが楚漢戦争の始まりです。劉邦を王と仰ぐ漢軍において、蕭何と曹参は必要不可欠な大幹部となっていました。蕭何は丞相（内閣総理大臣に相当します）として行政と兵士・物資の補給を担当し、曹参は命知らずの猛将として傷を負いながら楚軍と戦いました。

有能な人材を積極的に採用し、褒美を惜しまなかった劉邦は、ついに項羽を滅ぼして、皇帝に即位しました。この時、部下達の功績に順位をつけて、褒美と役職を与えました。戦功の最も多い曹参が第一位というのが大方の予想でしたが、意外なことに、行政や補給を担当した蕭何が第一位で、曹参は第二位でした。それだけでなく、蕭何は首都の丞相に、曹参は遠く離れた斉の丞相に任命されました。これが原因で、蕭何と曹参は不仲になったと言われていています。二人が不仲というのは、はたして本当だったのでしょうか？この疑惑を裏付けるエピソードをいくつか紹介します。

まず、劉邦が即位した後、肅清の嵐が吹き荒れました。肅清とは、反乱を企てている人物や将来的に危険な人物を排除することを言います。劉邦が最も頼りにした蕭何ですら、反乱の容疑で逮捕されました（すぐ釈放されましたが）。一方、曹参は首都から遠く離れた斉にいたので、肅清とは全く無縁にのびのびと働いていました。これは偶然なのでしょうか？

次に、劉邦の死から2年後に蕭何は重病となり、二代皇帝が蕭何の見舞いに訪れました。皇帝は蕭何と曹参の不仲を知りつつ、「君の後任として曹参はどうだろうか」と尋ねると、蕭何は「陛下は相国（政治家として最上位の職）を獲得されました。私に心残りはありません」と喜びながら、深々と頭を下げました。「仕事に好悪の感情を持ち込まない」という立派な振る舞いのように見えますが、喜びの表現がやや過剰にも思えます。

さらに、蕭何が死去したという知らせが曹参に届きました。すぐに曹参は部下達に引越し準備を命じます。不審に思った部下が理由を尋ねると、曹参は「蕭何の次は私だ」と答えました。間もなく曹参は首都に呼び戻され、予言通り丞相に任命されました。なぜ曹参は次の丞相が自分であると確信していたのでしょうか？

以上から、蕭何と曹参の間には何か密約があって、それを守るために不仲を装っていたのではないかと私にはそんな気がしてなりません。その答えは、永久にわからないと思いますが、だからこそ歴史は面白いと思います。ちなみに、三国志に登場する曹操は曹参の遠い子孫にあたります。なんとなく納得です。